私を育てた
あの時代、あの出会い

今、振り返る教師としての原点

生徒のために強い行動力を持つ大切さを学んだ

和歌山県立星林高校校長 平松正昭 HIRAMATSU MASAAKI

「学校を変えたい」という意欲を燃やしながら、果たせずにいた46歳の教務部長は、新たに赴任した校長が掲げる高い理想と、妥協を排してそこに向かう強い行動力を目の当たりにした。その衝撃は、やがて理想の教師像、管理職像として結実したという。和歌山県立星林高校の校長を務める平松正昭先生に、恩師との出会いと成長の日々をうかがった。

1998年度、46歳の私は和歌山県立那賀（なが）高校で教務部長を務めていました。学校全体の閉塞感を感じていたものの、どうしたらよいか分からない状態が続いていました。生徒の容儀の乱れや学力を伸ばし切れていないなどといった課題を抱えつつも、教師集団が一丸となって指導に当たる手立てが見つけられなかったのです。

そんな時、西下博通先生が校長として赴任されました。着任の挨拶で語られた抱負は、「那賀高校を世界に誇れる学校にしたい」。スケールが大き過ぎて、「けったいなことを言う校長さんやな」と驚いたものです。着任直後の職員会議で、ある教員を一喝したことも衝撃でした。「近づきがたい校長」、それが最初の印象でした。しかし、先生が何を目指しているのか、私はすぐに知ることになります。

西下先生は、自らの行動で教師としての範を示していきました。「生徒に守らせようとすることを教師が出来ていなくてどうする」と、朝は誰よりも早く登校し、時間厳守を徹底しました。また各教員に対して、始業時刻に教壇に立っていなかったり、多くの授業を自習にしたりすることがないよう指示するだけでなく、自習となったクラスで自ら進んで講義をしました。折り合いがつかない教員に対しては、粘り強く話し合いを重ねながらも、毅然とした態度を崩しませんでした。そして、わずか1年後には自習はほとんどなくなっていたのです。

「西下先生が那賀高校を変えつつある」という認識は、少しずつですが、確実に浸透していきました。そしてその頃には、私は西下先生の背中に自分の理想の教師像、管理職像を見るようになっていたのです。

西下先生の改革は、和歌山大との連携や、今でいう「総合的な学習の時間」を先取りした活動など、当時としては先進的な取り組みの導入にも及びました。西下先生は教員のやる気をいかに引き出すかを常に考え、どの教員のアイデアにも耳を傾けました。教職員の

先輩教師の言葉

県全体を見渡す広い視野を持ってほしかった

元・開智中学・高校校長
NISHISHITA HIROMICHI 西下博通

校長として那賀高校に赴任するに当たり、同校の様子は一通り把握していました。何よりも教師の規律意識を改めることが課題だと思っていたのです。声を荒らげなければいけない状況もあるだろうと思っていましたし、「たとえ反発を招いても那賀高校を変える」と決意していました。

赴任してみると、「このままの学校ではいけない」と思っている先生がいることはすぐに分かりました。平松先生もその一人で、私が呼び掛けると教務部長としてすぐにカリキュラム改革に尽力してくれました。教科担当が不在のため自習となったクラスで私が授業し始めると、平松先生も率先して授業をしにまわってくれました。そうした姿は、改革を進めようとする私の大きな励みとなったのです。

撮影◎和歌山県立那賀高校にて

ボトムアップと適切なトップダウンの組み合わせが学校を動かすという考えから、意欲のある者は誰でも歓迎しました。

新しい取り組みにより、生徒の成績は向上し、私たち教師はやりがいを感じていました。教師の意識が変われば、授業も進路指導も変わります。西下先生の赴任3年目には、開校以来はじめて国公立大合格者が50名を超えたのです。

西下先生はよく、学校運営を例えて「静かな池に石を投げ入れて波を起こすのも、校長の役割や」とおっしゃっていました。「着任早々の一喝も矢継ぎ早な改革も、学校の閉塞感を打破するためだった」。校長室で私にそう話してくれたこともあります。時には悪者に思われようとも、先を見通した取り組みを推進していく姿勢に、私は頼もしさと信頼を深めていきました。同時に、「いつか西下先生が異動すれば、改革が止まってしまうのではないか」という危惧も覚えました。

「西下先生の情熱を継承し、改革をもっと進めたい」。私の心でそんな思いが日に日に強くなりました。ついに私は、「那賀高校の教頭にしてください」と直訴したのです。ところが西下先生は、「それはあかん」と言下に否定しました。そして、私の気持ちが分かっていたかのように、「本校だけでなく、和歌山県全体のことを考えなければ、管理職は務まらない！」と続けたのです。

振り返ると、西下先生は自校の取り組みを県内に広く発信していました。県の全生徒の学力向上を考えていた西下先生に対し、自校ばかりを意識していた自分の視野の狭さを恥じました。

01年度、私は教頭として新宮高校に赴任し、新たな活動に取り組みました。見ず知らずの土地ではじめての管理職ということもあり、その過程は必ずしもスムーズではなかったものの、「確たる教育理念があれば必ず理解は得られる」という信念が、私を支えてくれました。それは、那賀高校で西下先生が教えてくれたものです。

現在の勤務校、星林高校には赴任3年目。校長として、自校の工夫や改善の仕方を積極的に県内に発信すると共に、他校からのアドバイスも求めています。目指すのは、どの学校も互いの取り組みを参照し合い、和歌山県全体で生徒を育てる環境づくりです。最近になってようやく、西下先生が掲げた理想の意味が、実感として理解できるようになってきたと思います。

右 にしした・ひろみち 国語科。和歌山東高校、和歌山県教育委員会などを経て、校長として那賀高校に3年間勤務後、私立・和歌山県開智中学・高校校長。現在、和歌山県私学審議委員会会長。

左 ひらまつ・まさあき 国語科。笠田高校などを経て、91年度、那賀高校へ。同校に11年間勤務した後、教頭として新宮高校に赴任。県教委、貴志川高校校長などを経て、08年度から星林高校校長。

平松先生は、和歌山大との連携事業や校外への発信活動などの橋渡しもしてくれました。学校のため生徒のためを思って取り組む姿勢から、教師としての情熱は十分に感じていました。

そのため、彼が「那賀高校で教頭になりたい」と言ってくれた時は、ありがたい気持ちでいっぱいでした。しかし管理職に求められるのは、県内を見渡す広い視野です。私は、平松先生に県を担う教育者となってほしいと思っていました。だからこそ、まずは縁もゆかりもない土地で、新しい取り組みをつくってほしいと伝えたのです。平松先生なら出来るはずだと確信していました。実際、新宮高校に教頭として赴任した彼の奮闘は、期待以上でした。

平松先生は現在、国際交流科を持つ星林高校の校長として、国際教育と「ふるさと教育」の融合を進めています。郷土の文化を学んだ生徒を海外に留学させ、和歌山県の素晴らしさを発信しようとしているのです。自校のことだけを考えていたのでは、こうした壮大な取り組みは生まれません。平松先生の目が何を捉えているのか。それは私にも分かりません。彼の視野は、既に私より大きく広がっているのですから。